

生涯発達と二次的コントロール

竹村 明子

仁愛大学人間学部

Life-span Development and Secondary Control

Akiko TAKEMURA

Faculty of Human Studies, Jin-ai University

二次的コントロール (Secondary Control) とは, Rothbaum, Weis, & Snyder (1982) が提唱したコントロール概念である。彼らは, 自己の目標や欲求に合わせて状況を変えるコントロールを一次的コントロールと名づけ, 状況に合わせて自己を変えるコントロールをSCと名づけた。生涯発達心理学では, 人は加齢に伴い身体的・認知的機能が低下するが, SCを発達させ, 衰退した状況と自己とのバランスを立て直し, 高齢期に適応すると推測されている。しかし, SC研究には多くの問題があり, 研究者の間で一致した結論に至っていない。本稿は, このSCと生涯発達の関係について考察することを目的に, 以下の4点について論じた。第1に, SCとは何かについてRothbaum et al. (1982) を基に振り返る。第2に, 生涯発達心理学の分野における先行研究をレビューする。第3に, 研究の問題点や課題についてまとめ, 第4に, 生涯発達心理学分野においてSCに関して研究を行うことの意義について論じた。

キーワード: 一次的コントロール 二次的コントロール 自己調整 生涯発達

人生はマニュアル通りには進まない。想定外の出来事や, 思うようにならない状況に何度も直面する。そのような場面では, 一度決めた事を押し通し乗り越える方法もあるが, 目標や手段を切り替えながら生き抜く方法もある。生涯発達心理学分野では, その過程を心理的側面から明らかにしようとする試みがなされている。そのアプローチの一つが, 一次的・二次的コントロール研究である。

一次的コントロール (Primary Control, 以下PC) とは, 自己を変えずに周りの状況をコントロールする過程を表し, 二次的コントロール (Secondary Control, 以下SC) とは, 状況に合わせて自己をコントロールする過程を表す概念である。そして人々は, 時にはPCやSCを別々に用い, 時には同時に用いながら困難な出来事に対処していると言われている。しかし, PCやSCとは具体的にどのような行為を指すのか, 適応に貢

献する事もあれば, 不適応を生じる事もあるのはなぜか, 発達とどのような関係があるのか, 研究者の間で様々な意見が交錯している。

本稿は, このうちSCに焦点を当て, 生涯発達の関係について論じることを主な目的とする。次節では, 先ず, SCとは何かについて説明する。次に, 生涯発達心理学の分野におけるSCの先行研究について紹介をする。そして第3に, SC研究の問題点や課題について指摘する。最後に, 生涯発達心理学分野において, SC研究を行うことの意義について論じていく。

1. SC概念について

1-1. SCとは

SCは, 1980年代前半にRothbaum, Weisz, & Snyder (1982) により提唱された概念である。彼らは, 自分の望む状態 (以下, 自己) と, 思うようにならない状況 (以

下、状況)の間でバランスをとる過程には2過程あると考えた。一つ目はPCと呼ばれ、自己を変えずに状況を変えるコントロール過程である。二つ目がSCと呼ばれ、状況を変えずに自己を変えるコントロール過程である。例えば、成人期以降に心身機能が衰退していく場面において、PC過程とは、自分は若いという自己を維持するため手術等で外見を若くする、運動を続けて体力を維持するなどが、典型として挙げられる。また、自分より衰退した他者と比較して、自分はまだまだ若いと考える事もPC過程に含まれる。これに対して、SC過程とは、年をとった事を受け入れ、一日で終わらせる仕事量を減らし何日かに振り分ける、鷹揚に物事を考えるようにする、自分一人でできない仕事は、人に依頼をしたり機械を購入したりする、などが典型として挙げられる。言葉を代えるなら、状況を受け入れ、状況に合わせて目標・考え方・価値観・行動を変えていく事がSC過程である。

1-2. SCが提唱された背景

Rothbaum et al. (1982) がPCとSCの概念を提唱した背景には、心理学分野において支配的であった考え方に対する批判がある。

1980年代において主流の考え方とは「自己を主張し環境を変えるコントロール(PC)が適応的であり、状況を優先し自己を変えるコントロール(SC)は不適応的である」というものである。例えば、White (1959) の効力感(feeling of efficacy)理論では、人は自分が能力を持つ人間であることを確認したいと動機づけられており、状況を変える事ができた時(PC)に能力があると感じ適応を高め、状況を変えられなかった時(SC)には無能感に陥り適応を低下させると考えられている。またRotter (1966) のInternal Locus of controlでは、自分の努力や能力が周りの状況を変えた原因であると認知した時(PC)に人は適応を高め、偶然や自分には統制できない要因により自分が影響を受けていると認知した時(SC)には人は適応を低下させると述べている。さらに、Seligman (1975) は、自分では状況を変えることができない体験を繰り返すと、無力感や諦めを学ぶと述べている。これらの考え方は、自分が状況をコントロールできる事が適応を高め、状

況に合わせて自己をコントロールする事は適応を低下させるという共通の考え方を示しており、まとめて統制理論と呼ばれる。

Rothbaum et al. (1982) は、このような統制理論に対し、状況に合わせて自己を変える過程(SC)にも適応的機能があると考え、SCが不適応か適応かは文脈により異なると指摘した。例えば、欧米のような個人の考えを重視する社会ではPCが適応をもたらすが、日本のような周りの人々の考えを重視する社会ではSCが適応をもたらす。また、加齢に伴う衰退など、想定できる人生の出来事に対して、人は心の準備をし、年をとる状況を受け入れ衰退に合わせて自分の価値観を変えている(SC)。彼らのこの主張は多くの分野で注目され、実証的検討が試みられてきた。そして、文化差の分野において、欧米ではPCが東アジアではSCが適応的であること、ストレス分野において完治が期待されない疾病ではSCが適応的であること、発達心理学分野において自分ではコントロールできない場面ではSCが適応的であること、などが報告されている。

1-3. SCの具体例

Rothbaum et al. (1982) は、SCの例として四つの方略(予期・代理・架空・解釈)をあげている。SCのうち、予期コントロール(predictive control)とは、統制困難な状況において否定的結果を前もって予期し、無力感を回避することを指す。例えば、高齢になれば誰もが思うように体が動かなくなることに心身の準備をしておくという方法がこれに含まれる。二つ目の代理コントロール(proxyまたはvicarious control)とは、環境をうまくコントロールできる強者と自分を結びつけ、その威光に浸ることを指す。例えばサッカーのワールドカップで日本代表が勝ったシーンを見た後、日本代表が着ていた青いユニフォームを着るといったことがあげられる。三つ目の架空コントロール(illusory control)とは、結果を運に帰属することを指す。例えば瀕死のがん患者が運命を受容することにより、感情のコントロールを行うことなどがこれに含まれる。四つ目の解釈コントロール(interpretive control)とは、統制困難な出来事を経験することの中にも意味を見出そうとすることを指す。例えば、高齢期の統合性の感

覚 (Erikson & Erikson, 1997) のように「自分の人生には失敗やつらいことが多数あったけれど、いろいろな経験ができてよかった」と自分の人生を受け入れ再評価するならば、絶望感を回避することができる。

さらに Azuma (1984) は、SCには目標を諦める側面と、目標を実現する側面があると述べた。すなわち、「泣く子と地頭にはかなわぬ」のように、状況を単に受け入れる事は目標を諦めるSCを表す。これに対して、「負けるが勝ち」のように、短期的には状況を優先し自己を抑制するが、長期的に見るならば自己の目標達成につながる事は、目標を実現するSCである。目標を実現するSCの例として、マスターズ陸上に参加する高齢者を挙げることができる。マスターズ陸上は、35歳以上の人々が、5歳刻みで競う競技である。そこでは、年齢や体力に合わせた目標が設定され、何歳になっても他者との競争を楽しむことができる。ある102歳の砲丸投げの選手(男性)は、練習で留意していることとして、48時間以上の休息を入れ筋肉の回復を待つことや、頑張りすぎない勇気を持つ事を挙げていた。この例は、衰退する体力に合わせて自己を抑制することが、長く競技を続ける秘訣となっていることを示しており、目標を実現させるSCと捉えることができる。また竹村・仲(2013)は、高齢者を対象としてインタビュー調査を行い、体力の衰退や病気に対する対処には「病気とうまく付き合うこと」や「今日一日でできなければ、何日かに分けて仕事をする」、「できない事は無理にやらない。できる事をやる。そのように切り替える」という回答があった事を報告している。これらの回答も、自己を抑制することが健康的な生活につながることを示しており、「負けるが勝ち(方略)」を体現しているといえる。

この他、SCの例として、「状況をそのまま受け入れる」、「高い理想水準を現実に合わせて引き下げる」、「出来事を肯定的に考える」、「困難な体験の中に意味を見出す」など多くのコントロール方略が挙げられており、SCは単一概念というより、多様な自己調整を包括する概念であると考えられている。

2. 生涯発達心理学分野におけるSC研究

近年、SCは生涯発達心理学分野において多くの研

究が報告されている。しかし、各研究者が、独自のSC概念を用いて検討しているために、結果の間に一貫性が見いだされていない。そこで本節では、生涯発達心理学分野における代表的な研究者のSC概念について説明を行う。

2-1. Brandtstädterらの研究：Dual-process model of assimilative and accommodative coping (二過程モデル)

Brandtstädterと同僚は、PCおよびSCの概念を、個人の目標と現実のズレを縮小する二過程モデル(dual-process model)として説明している(Brandtstädter & Renner, 1990; Brandtstädter, Wentura, & Greve, 1993; Brandtstädter & Rothermund, 2002)。彼らの二過程モデルでは、PC類似の同化型対処(assimilative coping)を「制約を取り除き現実(状況)を変えてことで目標と現実のズレを縮小しようとする対処」と理論的に定義し、SC類似の調整型対処(accommodative coping)を「制約のある現実(状況)を受け容れ、目標を調整することで目標と現実のズレを縮小しようとする対処」と理論的に定義している。そして、生物学的制約(例、老化現象)が高くなる高齢期において、PC(同化型対処)は低下し、SC(調整型対処)が増加すると考えている。またSCの機能に関して、高い目標水準を引き下げる、現在の状況に価値を見出す、状況の良い側面に目を向ける、という対処方略により、PC(同化型対処)の機能低下が心理的健康に及ぼす悪影響を緩衝する作用があると述べている(Brandtstädter, 1999)。

Brandtstädterらは上述したモデルを基に、Tenacious Goal Pursuit and Flexible Goal Adjustment (TGP & FGA) 尺度を開発している(Brandtstädter & Renner, 1990)。TGP尺度とは、PC類似の同化型対処を測定する尺度であり「制約のある状況で粘り強く目標を追求する対処を一方の極とし、制約により学習性無力感に陥り目標を諦める対処を他方の極とする対処」と操作的に定義している。またFGA尺度は、SC類似の調整型対処を測定する尺度であり「制約のある状況を肯定的に再評価する対処および行き詰った計画や課題を変更する対処」と操作的に定義している。そして実証

研究により、①18~81歳では年齢が高くなるほどPC (TGP得点) が低下し、SC (FGA得点) が高くなること (Figure 1とFigure 2参照;Brandstädter & Renner, 1990; Brandstädter, 1999), ②SC (FGA得点) は状況悪化と心理的健康の低下の関係を緩衝する作用があること (Brandstädter & Rothermund, 1994), ③SC (FGA得点) が高いほど状況を肯定的に捉えていること (Brandstädter, 1999), などを明らかにしている。

Brandstädterらは、34~63歳の男女を対象に、SCを測定している。彼らに従うなら、63歳にかけてSCは増加することが報告されている。

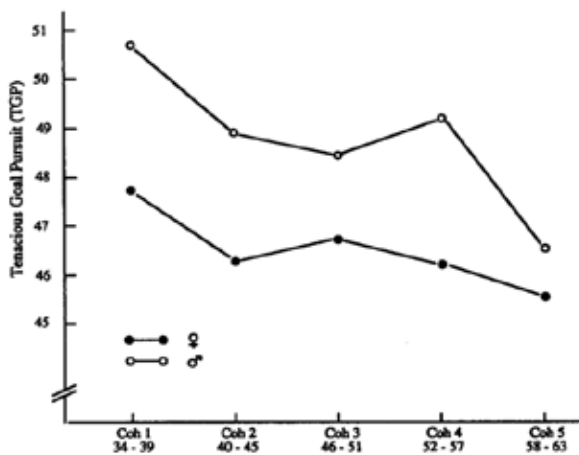


Figure 1. PC (同化型対処) の性別・年代別平均値
注) ●は男性, ○は女性を表す

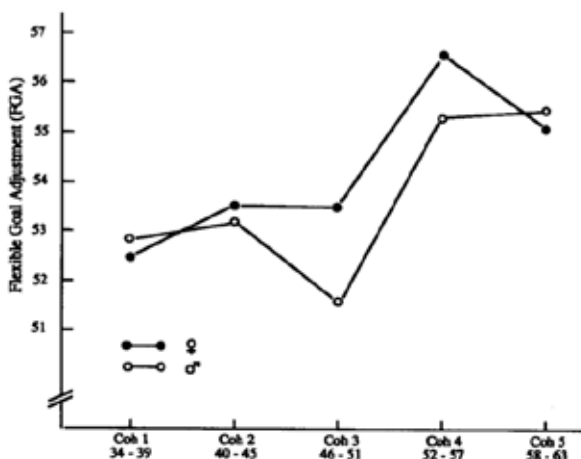


Figure 2. SC (調整型対処) の性別・年代別変化
注) ●は男性, ○は女性を表す

2-2. Heckhausenらの研究:Life span theory of Control & the motivational theory of life-span development (コントロールの生涯理論)

SC研究の生涯発達心理学的アプローチの中で、最も多くの研究が報告されている理論が、Heckhausenと同僚が提唱するコントロールの生涯理論である (e. g., Heckhausen & Schulz, 1995; Heckhausen, 1997; Heckhausen, Wrosch, & Schulz, 2010). 彼らは、先ずPCをPC能力とPC努力に分けた。PC能力 (PC capacity) は「状況をコントロールできる潜在的能力」と定義され、PC努力 (PC striving) は「自己の目標にあわせて状況を変化させる行動的努力 (striving)」と定義されている。そして、SC努力 (SC striving) は「状況に合わせて自己の認知を変化させる認知的努力 (striving)」と定義されている。彼らによれば、①PC努力は常にSC努力より優先して用いられ (primary control is primacy), この傾向は基本的で文化を超えた普遍性 (universal) がある (Heckhausen & Schulz, 1995), しかし、②加齢に伴いPC能力が低下した場面において、PC努力が低下するのを防ぐためSC努力が作動する、③そして、PC能力が目標達成可能範囲内であれば、SC努力はPC努力を増大させ目標を達成するように働くが、PC能力が目標達成不可能なほど低下した場合には、SC努力はPC努力を他の (実現可能な) 目標に振り替えることでコントロールの喪失感 (PC能力の低下から生じる無力感) から自己を守る機能を果たす、すなわち、④心身機能の低下が生じる高齢者ほどSC努力が増大する、と述べている。

Heckhausenらは、上述した考え方を基に、PC/SC最適化尺度 (Optimization in Primary and Secondary Control Scale; OPSCS) を開発している (Heckhausen, Schulz, & Wrosch, 1999). 彼らはPC努力とSC努力をさらに選択 (selectivity; 資源を投資する目標を選ぶこと) と補償 (compensation; 失敗や喪失を補うこと) に分け、選択的PC (selective primary control) を「内的資源 (例, 努力や, 時間, 能力) を目標に投資すること」と定義し、補償的PC (compensatory primary control) を「外的資源 (例, 他者からの支援や他の手段) を見つけ出すこと」と定義し、選択的SC (selective secondary control) を「選んだ目標に対してPCを続

けるように動機づける認知的自己調整」と定義し、補償的SC (compensatory secondary control;最近では離脱や諦めの意味で disengagement という名称を用いている)を「失敗や喪失の経験から動機づけ資源を守るため、行き詰った目標の価値を低下させ、他の目標の価値を見直す認知的自己調整」と定義している。そして実証的検討により、①PC努力は健康に問題がある成人や介護をしている成人の症状や抑うつを緩和する機能があること (Wrosch, Schulz, & Heckhausen, 2002), ②PC能力は成人期の前期, 中期, 後期になるに伴い低下すること (Wrosch & Heckhausen, 2002), ③SC努力は成人期以降, 年齢とともに増加すること (Wrosch & Heckhausen, 2002), ④若者 (青年期や成人初期の個人) は, 統制困難な場面において, 選択的SCを用いてPC努力を維持していること (Poulin, Haase & Heckhausen, 2005), ⑤高齢者 (成人後期の個人) は, 過去の出来事を後悔する場面 (統制不可能な場面) において, 補償的SC (例, 自分より低い他者との社会的比較, 自己防衛の原因帰属, 新たな目標設定)を用いて抑うつを軽減させていること (Wrosch, Bauer, & Scheier, 2005), などを明らかにしている。Heckhausenらは, 加齢に伴うSCの増加に関して, PC能力は中年期以降低下し, そのままでは無力感が原因でPC努力は低下してしまうが, SC努力を増加し, 年をとっても自分には残された能力があると自己の認知を変えることで, PC努力を維持しようと動機づけられる, と考えている。彼らの考え方を示したモデル図を Figure 3 に示す。

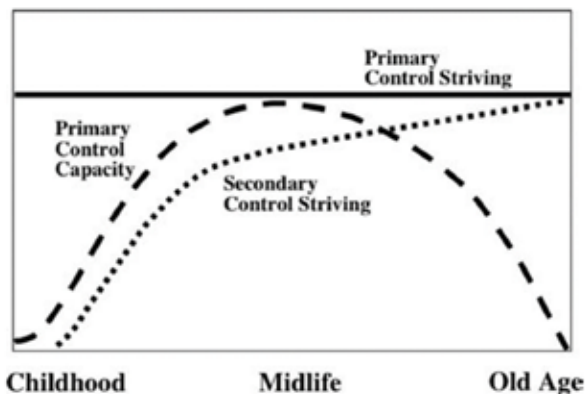


Figure 3. コントロールの生涯理論に関するモデル図

2-3. Baltesらの研究: 選択的最適化と補償の理論 the model of selective optimization with compensation (SOC)

PCやSCの概念を用いているわけではないが, コントロールと生涯発達の関係について述べた理論に, Baltesらが提唱したSOC理論がある (e. g., Baltes & Baltes, 1990; Freund & Baltes, 1998; 2002; Lerner, Freund, De Stefanis, & Habermas, 2001). Baltesらは, 高齢期に適応している状態を, 肯定的 (望ましい) 結果を獲得し, 否定的 (望ましくない) 結果を回避することと捉え, この状態をサクセフル・エイジングと呼んだ。そして, SOCモデルは, サクセフル・エイジングを理解する重要な枠組みを提供すると述べている。すなわち, 生涯において, 人はチャンスに巡り合うこともあれば, 資源が減少することもあり, その状況に適応するために, 選択的に選んだ目標を, 補償作用を行いながら, 熟達化 (最適化) に向かう過程を必要とするのである。

Baltesに従えば, 選択 (selection) とは, 資源 (例, 時間やエネルギー) が低下した場面で, 目標の選択を行う事である。人はすべての発達のチャンスを追い求めることができない。よって, 資源に制約がある場面では, 目標を絞り, その目標を最適化 (熟達) していくことが求められる。次に最適化 (optimization) とは, 選択した目標で熟達できるよう, 内的または外的資源を配分したりや洗練することである。最後に補償 (compensation) とは, 資源不足や目標達成手段が低下した場面において, 目標維持のために行われる代替手段の事である。Baltes (1997) はこの具体例として, 80代になってもピアノを弾き続けたルービンシュタイン (Arthur Rubinstein) の例をあげている。ルービンシュタインは, 厳選した作品を演奏し (選択), 少ない部分をさらに練習して最適化し (最適化), 印象操作 (速い演奏箇所の前はよりゆっくりと演奏し, 次の箇所のテンポの速さを印象づける, など) (補償) を用いて, 80代での演奏を遂行していったことを挙げている。

Baltesらは72~102歳の高齢者を対象として, SOCの3つのコンポーネント (選択・最適化・補償) について測定している (Freund & Baltes, 1998)。その結果, 加齢に伴い3つのコンポーネントとも低下する事を報

告している (SOCと年齢の相関 $r = -.26$)。当初、彼らは理論を基に「加齢に伴い資源は低下するため、SOCを必要とする傾向は高まる」と予想していたが、実際の結果は予想と異なるものであった。彼らはこの結果を基に、成人後期の個人は目標を維持するためにSOCを必要とするものの、加齢と共にSOCを実行するための資源 (時間やエネルギー) が低下してしまい、結論としてSOCの低下が生じるのではないかと推論している。

3. SC研究の問題点

SCと生涯発達について、多くの研究結果が蓄積されてきた。しかし、研究内容に関して多くの問題が指摘されており、研究者の間で一致した結論に至っていない。本節では、SC研究の問題として、SC概念の多様性の問題、概念構造の問題、SCの加齢変化に関する問題を取り上げ、SC研究の問題点をまとめる。

3-1. SC概念の多様性

生涯発達心理学の研究ではないが、研究者間におけるSC概念の違いについて、Morling & Evered (2006) は、SC概念のどこに焦点を当てるかによりSC概念が異なることを指摘している (竹村・仲, 2012)。彼らはまずBrandtstädterのSC概念について、自己のコントロール能力が低下した状況を受け入れ、その状況へ調和しようとするSC機能に注目する立場であると考え、このような立場のSC概念をFit-focused SC (調和焦点型SC) と分類した。そして、この立場の研究者は、PCとSCはそれぞれ独立に作動し、SCには認知を変える方略だけでなく、目標調整や手段の切り替えにより問題を解決する側面もあると捉えた。次に、HeckhausenのSC概念について、自己のコントロール能力の低下を回避するSC機能に注目する立場であると考え、このような立場のSC概念をControl-focused SC (コントロール焦点型SC) と分類した。そして、この立場の研究者は、PCが機能しない状況でSCがPCを維持するように働き、PCを問題解決型、SCを情動調節型と捉えていると述べた。

Morling & Evered (2006) によれば、現在、欧米ではコントロール焦点型SCの研究が最も多く報告され

ているが、この立場はSCの機能に関して、自己概念を変える方略と捉えず、逆にコントロール能力があるという自己概念を維持する方略と捉えているという点で、Rothbaum et al. (1982) の主張に沿っていない。一方で、調和焦点型SCの研究は、SCの機能に関して、個人は体力の衰退に合わせ自己の認知や行動を変えており、それが健康的な生活に貢献すると捉えており、Rothbaum et al. (1982) の主張と符合する。よって調和焦点型SCがRothbaum et al. (1982) らの主張を踏襲しており、今後多くの研究をする事が必要であると述べている。

3-2. SC概念構造について

SCの概念構造に関して、1因子構造、多因子構造、階層構造など、研究者間で多様な概念構造が示されている。

第1に、1因子構造の例としてBrandtstädterら (e.g., Brandtstädter & Renner, 1990) の研究を挙げることができる。彼らは、SCを自己の目標を状況に合わせて調整するコントロール方略と定義し、それを測定するFlexible Goal Adjustment尺度 (FGA尺度) を作成している。FGA尺度は「人生の困難な出来事に出合っても明るい面を見つけることができる」や「チャンス逃しても、たいていそのことを長くひきずったりしない」など15項目から構成されている。Brandtstädter & Renner (1990) は、成人初期から後期の人々を対象にFGA尺度の検証を行い、SCは1因子構造である事を示している。

第2に、多因子構造を想定した例として、複数の研究者を挙げることができる。例えばHeckhausenら (Heckhausen & Schulz, 1995; Heckhausen, Wrosch, & Schulz, 2010) は、SCを2因子構造と捉え、Selective SC (選択的SC; 目標達成を促すSC) と、Compensatory SC (補償的SC; 目標を諦めるSC) を想定している。彼らは選択的SCを測定する尺度として「私は、何か決心すると、それ以外のことには迷わないようにしている」や「私は、何か決心したとき、それは正しい判断だったと思うようにしている」などの4項目を作成し、補償的SCを測定する尺度として「私は、何かうまくできないときは、前にうまくできたことを

思い出して慰める」や「私は、何かうまくいかないとき、運が悪かったとあきらめることにしている」などの4項目を作成した。そして、2つの因子は、それぞれ独立している事を確認している。また、Rothbaum et al. (1982) は、4つのSC方略(予期・代理・架空・解釈)を想定している。しかし彼らは、この4つ以外にもSC方略はあると述べており、SCは多様なコントロール方略を包括する概念であることが示唆されている。さらに、Morling & Evered (2006) は、特に調和焦点型SCに関して取り上げ、SCには受容と自己調整の2側面が必須であると述べている。受容的側面とは状況を受け容れるコントロール方略であり、自己調整的側面とは状況に合わせて自己を変えるコントロール方略の事である。例えば、年を取り身体の機能が衰えた場面では、思うように身体が動かなくなった状況を受け入れる(受容的側面)だけでは諦めになってしまう。しかし、受容過程に加え、衰退していく身体に合わせて、自分の行動や生活習慣を変える(自己調整的側面)ならば、状況に適応的に調和することができると述べている。しかし、Rothbaum et al. (1982) も Morling & Evered (2006) も、多因子構造に関する検証は行っていない。今後、因子構造に加えて、各因子間の関係についても、実証的に検討する必要がある。

第3に、階層構造を想定している研究者として、Skinner, Edge, Altman, & Sherwood (2003) を挙げる事ができる。彼らに従うなら、SCの最も下位に位置する概念として、具体的なコントロール行為(例、状況の明るい面に目を向ける)が設定され、次に各コントロール行為を包括する中位概念としてコントロール方略(例、肯定的解釈)が設定され、これらのコントロール方略を包括する上位概念としてSCが位置付けられている(Skinner, et al., 2003)。

近年、SCは多様なコントロール方略を包括する幅広い概念として、研究者の意見が収束されつつある。しかし、多因子構造なのか、Skinner et al. (2003) が示すような階層構造なのかを明らかにする事は、今後のSC研究の課題といえる。

3-3. SCとPCの加齢変化

SCの加齢変化に関して、SCが加齢に伴い増加する

という意見は、研究者の間で共通している。しかし、PCの加齢変化に関して、それぞれ異なる結果が研究者により報告されている。

例えば、Brandtstädter (2002) は、加齢に伴いSCは増加するが、PCは低下すると述べている。彼らに従うなら、年をとるほど心身機能が低下し、状況を変えようとするコントロール能力(PC)も低下する。しかし、目標の水準を状況に合わせて調整する(SC)ことにより、PCの低下により生じる無力感を回避すると考えられる。次にHeckhausen et al. (2010) は、SCは加齢に伴い増加し、PCは維持されると想定している。彼らに従うなら、年をとるほど心身機能が低下し、状況をコントロールしようとする機能(PC)も低下する危機が生じる。しかし、状況をコントロールできるという認知は、個人にとって自尊感情や適応を維持するために、捨て難い認知である。そこで、自分にはまだコントロール能力があると、自分の認知をコントロールし(SC)、PCを維持するように働くと考えられている。一方で、Freund & Baltes (2002) は、成人後期の人々を対象に、状況をコントロールする能力(最適化)も、コントロールを補償する能力(補償)も、加齢に伴い低下することを報告している。彼らは、この結果に関して、成人後期では補償する機能すらも低下していくのではないかと解釈している。

これらの結果をまとめるならば、成人初期と成人後期を比べた場合、PC低下を補償するSCは増加するが、後期高齢になった場合、SCすらも低下していくことが推測される。しかし、結論に至るまでには、多数の結果を蓄積する事が求められる。

4. 二次的コントロール概念でライフコースを考える意義と今後の課題

最後に、ライフコースや生涯発達を研究する上で、SC概念に基づいて検討する意義について考えたい。

第1に、自己を変えるコントロールの中にある適応的側面を示すことができると考えられる。従来、自己を変える事は、消極的・受動的対処であり、不適応を生じると考えられてきた。しかし、人生では自分を抑制しなければならない場面に頻りに直面するが、多く

の個人は適応的にそれを乗り越えている。すなわち、状況に合わせて自己をコントロールすることにも、適応的機能があると推測される。また、自己をコントロールする事は、単に情動を調整するだけでなく問題解決を目指す適応的側面もあるのかもしれない。例えば、“負けるが勝ち”のように、短期的には自己抑制であっても、状況に調和することで、長期的には適応に至る自己コントロールがある。そのような自己調整について明らかにすることが、必要であろう。

第2に、状況へ調和するSCの特徴を包括的に捉える事は、人間の生涯にわたる変化についてより深く理解することにつながると考えられる。SCの加齢変化に関して、多くの研究が増加することを報告している。その背景には、年をとり心身機能が低下することと、SCの間に関連があることを示しており、SCの加齢変化を調べることで、高齢期における発達のメカニズムを明らかにできると期待される。

その他、SC研究では、文化や社会、ストレス状況なども、SCの影響要因となる事が示されている。このようにSC研究を発展させることは、人々の生涯にわたる発達について多くの知見を得ることができると期待される。

付 記

博士論文および日本心理学会第77回大会において発表したものの一部を利用した。

引用文献

- Azuma, H. (1984). Secondary control as a heterogeneous category. *American Psychologist*, **39**, 970-971.
- Baltes, E B., & Baltes, M. M. (Eds.). (1990). *Successful aging: Perspectives from the behavioral sciences*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Baltes, P.B. (1997). On the Incomplete Architecture of Human Ontogeny: Selection, optimization and compensation, as foundation of developmental theory. *American Psychologist*, **52**, 366-380.
- Brandtstädter, J., & Renner, G. (1990). Tenacious goal pursuit and flexible goal adjustment: Explication and age-related analysis of assimilative and accommodative strategies of coping. *Psychology and Aging*, **5**, 58-67.
- Brandtstädter, J. & Rothermund, K. (1994). Self-percepts of control in middle and later adulthood: Buffering losses by rescaling goals. *Psychology and Aging*, **9**(2), 265-273.
- Brandtstädter, J., & Rothermund, K. (2002). The life-course dynamics of goal pursuit and goal adjustment: A two-process framework. *Developmental Review*, **22**, 117-150.
- Brandtstädter, J. (1999). Sources of resilience in the aging self: Toward integrating perspectives. In T.M. Hess, & F. Blanchard-Fields (Eds.), *Social cognition and aging* (pp. 123-141). San Diego, CA: Academic Press.
- Brandtstädter, J., Wentura, D., & Greve, W. (1993). Adaptive resources of the aging self: Outlines of an emergent perspective. *International Journal of Behavioral Development*, **16**(2), 323-349.
- Erikson E.H. & Erikson J.M. (1997). *The life cycle completed*. New York, N.Y: W.W. Norton.
- Freund, A.M. & Baltes, P.B. (1998). Selection, optimization, and compensation as strategies of life management: Correlations with subjective indicators of successful aging. *Psychology and Aging*, **13** (4), 531-543.
- Freund, A.M. & Baltes, P.B. (2002). The Adaptiveness of selection, optimization, and compensation as strategies of life management: Evidence from a preference study on proverbs. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, **57B** (5), 426-434.
- Heckhausen, J., & Schulz, R. (1995). A life-span theory of control. *Psychological Review*, **102**, 284-304.
- Heckhausen, J. (1997). Developmental regulation across adulthood: Primary and secondary control of age-related challenges. *Developmental Psychology*, **33**(1), 176-187.
- Heckhausen, J., Wrosch, C., & Schulz, R. (2010). A motivational theory of life-span development. *Psychological Review*, **117**, 32-60.
- Heckhausen, J., Schulz, R., & Wrosch, C. (1998). *Developmental regulation in adulthood: Optimization in Primary and Secondary Control—A multiscale questionnaire (OPS-Scales)*. Unpublished Technical Report. Berlin, Germany: Max Planck Institute for Human Development and Education.
- Lerner, R. M., Freund, A. M., De Stefanis, I., & Habermas, T. (2001). Understanding developmental regulation in adolescence: The use of the selection, optimization, and compensation model. *Human Development*, **44**, 29-50.
- Morling B., & Evered, S. (2006). Secondary control reviewed and defined. *Psychological Bulletin*, **132**, 269-296.
- Poulin, M., Haase, C. M., & Heckhausen, J. (2005).

- Engagement and disengagement across the life span: An analysis of two-process models of developmental regulation. In W. Greve, K. Rothermund, & D. Wentura (Eds.) *The adaptive self: Personal continuity and intentional self-development* (pp. 117-135). Ashland, OH: Hogrefe & Huber Publishers.
- Rothbaum, F., Weisz, J. R., & Snyder, S. S. (1982). Changing the world and changing the self: A two-process model of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 5-37.
- Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement, *Psychological Monographs*, **80**, 1-28.
- Seligman, M.E.P. (1975). *Helplessness: On depression, development and death*. San Francisco: Freeman.
- Skinner, E., Edge, K., Altman, J., & Sherwood, H. (2003). Searching for the structure of coping: A review and critique of category systems for classifying ways of coping. *Psychological Bulletin*, **129**, 216-269.
- 竹村明子・仲真紀子 (2012). 二次的コントロール概念の多様性と今後の課題. *教育心理学研究*, **60**, 211-226.
- 竹村明子・仲真紀子 (2013). 身体や健康の衰退に調和するための高齢者の対処—二次的コントロール理論を基に. *発達心理学研究*, **24**, 160-170.
- White, R. (1959). Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, **66**, 297-333.
- Wrosch, C., & Heckhausen, J. (2002). Perceived control of life regrets: Good for young and bad for old adults. *Psychology and Aging*, **17**, 340-350.
- Wrosch, C., Bauer, I., & Scheier, M.F. (2005). Regret and quality of life across the adult life span: The influence of disengagement and available future goals. *Psychology and Aging*, **20**, 657-670.
- Wrosch, C., Schulz, R., & Heckhausen, J. (2002). Health stresses and depressive symptomatology in the elderly: The importance of health engagement control strategies. *Health Psychology*, **21**, 340-348.

